

表 7 SSC, SLE, MCTD 群間での臨床症状・検査の比較

①	SLE+その他の膠原病 (n=43)	SSc+その他の膠原病 (n=55)	p value
肺高血圧診断時の年齢 mean (y)	43.0±11.9	59.5±10.2	<0.001
Female no. (%)	41 (95.3)	48 (87.3)	0.047
膠原病の罹病 5 年以上 no./total no. (%)	31/43 (72.1)	36/55 (65.5)	0.485
Pa <sub>O<sub>2</sub></sub> (Torr) mean	79.4±12.2	69.3±14.0	0.002
%DL <sub>CO</sub> < 55% no./total no. (%)	6/15 (40.0)	27/33 (81.8)	<0.001
%DL <sub>CO</sub> mean	58.9±15.7	41.6±20.0	0.003
胸部 CT 像 GGO あり no./total no. (%)	7/34 (20.6)	28/48 (58.3)	<0.001
肺炎の既往 (あり) no./total no. (%)	12/43 (28.0)	25/55 (45.5)	0.045
死亡 no./total no. (%)	3/43 (7.0)	8/55 (14.5)	<0.001
死亡のうち、膠原病罹病 5 年以上	1	6	

②	MCTD+その他の膠原病 (n=35)	SSc+その他の膠原病 (n=55)	p value
肺高血圧診断時の年齢 mean (y)	44.4±16.4	59.5±10.2	<0.001
Female no. (%)	33 (94.3)	48 (87.3)	0.248
膠原病の罹病 5 年以上 no./total no. (%)	26/34 (76.5)	36/55 (65.5)	0.265
Pa <sub>O<sub>2</sub></sub> (Torr) mean	73.7±14.3	69.3±14.0	0.215
%DL <sub>CO</sub> < 55% no./total no. (%)	10/21 (47.6)	27/33 (81.8)	0.013
%DL <sub>CO</sub> mean	58.5±17.0	41.6±20.0	0.002
胸部 CT 像 GGO あり no./total no. (%)	11/31 (35.5)	28/48 (58.3)	0.031
肺炎の既往 (あり) no./total no. (%)	13/35 (37.1)	25/55 (45.5)	0.228
死亡 no./total no. (%)	2/35 (5.7)	8/55 (14.5)	0.720
死亡のうち、膠原病罹病 5 年以上	2	6	

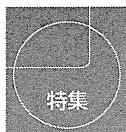
  

③	SLE+その他の膠原病 (n=43)	MCTD+その他の膠原病 (n=35)	p value
肺高血圧診断時の年齢 mean (y)	43.0±11.9	44.4±16.4	0.677
Female no. (%)	41 (95.3)	33 (94.3)	0.475
膠原病の罹病 5 年以上 no./total no. (%)	31/43 (72.1)	26/34 (76.5)	0.667
Pa <sub>O<sub>2</sub></sub> (Torr) Mean	79.4±12.2	73.7±14.3	0.105
%DL <sub>CO</sub> < 55% no./total no. (%)	6/15 (40.0)	10/21 (47.6)	0.662
%DL <sub>CO</sub> mean	58.9±15.7	58.5±17.0	0.939
胸部 CT 像 GGO あり no./total no. (%)	7/34 (20.6)	11/31 (35.5)	0.261
肺炎の既往 (あり) no./total no. (%)	12/43 (28.0)	13/35 (37.1)	0.500
死亡 no./total no. (%)	3/43 (7.0)	2/35 (5.7)	0.481
死亡のうち、膠原病罹病 5 年以上	1	2	

(30.7%) と最も多く、ついで全身性エリテマトーデス (systemic lupus erythematosus : SLE) および SLE 関連 43 例 (24.0%), 混合性結合組織病 (mixed connective tissue disease : MCTD) 関連 35 例 (19.6%), シェーグレン症候群 (Sjögren's syndrome) 14 例 (7.8%) の順であった。

呼吸機能については拡散能の低下例

(%DL<sub>CO</sub> 55% 以下をピックアップした) が全体では 61.4% であったが、SSc を含む症例では 81.8% に %DL<sub>CO</sub> の低下があり、SSc を除く症例では約半数の 49.1% に %DL<sub>CO</sub> の低下が認められた。CT 像では CT 施行例 141 例中 53 例 (37.6%) に GGO を認めた。SSc 関連では GGO は 58.3%, SLE 関連で 20.6%, MCTD 関連で 35.5% と SSc 関連で半数以上に認めら



れた。また、%DL<sub>CO</sub> の低下と GGO の両者を呈する症例については CT 施行例 141 例中 25 例 (17.7%) に認められた。動脈血ガス分析では PaO<sub>2</sub> 60 Torr 以下が膠原病全体では 17.9% であったが、SSc 関連では 31.6% に認められた。6 分間歩行は SSc 関連で 293 m と最も歩行距離が短かった。治療薬では経口 PGI<sub>2</sub> 単独は 179 例中 47 例 (26%) または他剤との併用が 104 例 (58.1%) と最も多く、経静脈投与となるエポプロステノールの使用は単独 3 例、他剤併用 14 例 (17/179 例、9.5%) であり、IPAH より使用頻度は低かった。

膠原病内訳別の詳細データを表 6 に、また SSc, SLE, MCTD 群間の比較データを表 7 に示す。膠原病例では肺動脈に加えて肺静脈炎の関与が推察され、膠原病合併 PAH 中には 10~20% の PVOD 類似病変である可能性を示唆した。

## まとめ

現在の PVOD 臨床診断基準として %DL<sub>CO</sub> の著明な低下、HRCT での GGO が有用と考えられた。膠原病合併 PAH 症例中に %DL<sub>CO</sub> の低下と GGO を示し、かつ低酸素血症を呈する症例が約 10~20% 認められ、これらは静脈病変を合併している可能性が示唆された。PVOD は現在の報告数よりも実際は多い可能性があり、肺移植を優先した治療選択のため的確な診断が必要で PAH の鑑別診断として常に念頭におく必要があると思われる。

### 文献

- Montani D, Price LC, Dorfmüller P, et al. Pulmonary veno-occlusive disease. Eur Respir J 2009; 33: 189–200.
- Holcomb BW Jr, Loyd JE, Ely EW, et al. Pulmonary veno-occlusive disease: a case series and new observations. Chest 2000; 118: 1671–9.
- 厚生労働科学研究費補助金難治性疾患克服研究事業、肺静脈閉塞症についての病理病態解明と診断基準確立のための研究平成 22 年度総括・分担研究報告書.
- Stoler MH, Anderson VM, Stuard ID. A case of pulmonary veno-occlusive disease in infancy. Arch Pathol Lab Med 1982; 106: 645–7.
- Hora J. Zur Histologie der Klinischen "primären Pulmonalsklerose". Frankf Z Pathol 1934; 47: 100–18.
- Heath D, Segel N, Bishop J. Pulmonary veno-occlusive disease. Circulation 1966; 34: 242–8.
- Simonneau G, Galie N, Rubin LJ, et al. Clinical classification of pulmonary hypertension. J Am Coll Cardiol 2004; 43: 5S–12S.
- Lantuéjoul S, Sheppard MN, Corrin B. Pulmonary veno-occlusive disease and pulmonary capillary hemangiomatosis: a clinicopathologic study of 35 cases. Am J Surg Pathol 2006; 30: 850–7.
- Montani D, Price LC, Dorfmüller P, et al. Pulmonary veno-occlusive disease. Eur Respir J 2009; 33: 189–200.
- Dorfmüller P, Humbert M, Perros F, et al. Fibrous remodeling of the venous system in pulmonary arterial hypertension associated with connective tissue disease. Hum Pathol 2007; 38: 893–902.
- Johnson SR, Patosios D, Hwang DM, et al. Pulmonary veno-occlusive disease and scleroderma associated pulmonary hypertension. J Rheumatol 2006; 33: 2347–50.
- Gunther S, Jais X, Maitre S, et al. Computed tomography findings of pulmonary venoocclusive disease in scleroderma patients presenting with precapillary pulmonary hypertension. Arthritis Rheum 2012; 64: 2995–3005.
- Swift GL, Gibbs A, Campbell IA, et al. Pulmonary veno-occlusive disease and Hodgkin's lymphoma. Eur Respir J 1993; 6: 596–8.
- Steward CG, Pellier I, Mahajan A, et al. Severe pulmonary hypertension: a frequent complication of stem cell transplantation for malignant infantile osteopetrosis. Br J Haematol 2004; 124: 63–71.

---

## ABSTRACT

### Pathology of Pulmonary Veno-Occlusive Disease

Hatsue ISHIBASHI-UEDA \*

- 15) Seguchi M, Hirabayashi N, Fujii Y, et al. Pulmonary hypertension associated with pulmonary occlusive vasculopathy after allogeneic bone marrow transplantation. *Transplantation* 2000; 69:177-9.
- 16) Trobaugh-Lotrarian AD, Greffe B, Deterding R, et al. Pulmonary veno-occlusive disease after autologous bone marrow transplant in a child with stage IV neuroblastoma: case report and literature review. *J Pediatr Hematol Oncol* 2003; 25:405-9.
- 17) Tanabe N, Sugiura T, Jujo T, et al. Subpleural perfusion as a predictor for a poor surgical outcome in chronic thromboembolic pulmonary hypertension. *Chest* 2012; 141: 929-34.
- 18) Sakao S, Tatsumi K. Crosstalk between endothelial cell and thrombus in chronic thromboembolic pulmonary hypertension: perspective. *Histol Histopathol* 2013; 28: 185-93.
- 19) Pietra GG, Capron F, Stewart S, et al. Pathologic assessment of vasculopathies in pulmonary hypertension. *J Am Coll Cardiol* 2004; 43: 25S-32S.
- 20) Montani D, Achouh L, Dorfmüller P, et al. Pulmonary veno-occlusive disease: clinical, functional radiologic, and hemodynamic characteristics and outcome of 24 cases confirmed by histology. *Medicine (Baltimore)* 2008; 87: 220-33.
- 21) Montani D, Jais X, Price LC, et al. Cautious use of epoprostenol therapy is a safe bridge to lung transplantation in pulmonary veno-occlusive disease. *Eur Respir J* 2009; 34: 1348-56.

(Author's)

\**National Cerebral and Cardiovascular Center,  
Department of Pathology, Suita*

# PVOD：診断と治療

小川愛子\* 松原広己\*

## Summary

肺静脈閉塞症（PVOD）は肺毛細血管腫症（PCH）と合わせて、肺高血圧症臨床診断分類では1群とされている。著明な労作時低酸素血症と、特徴的な画像所見などからその存在を疑う。肺移植以外には確立した治療法は存在せず、肺血管拡張薬により肺水腫を惹起する危険性があり、治療にあたって注意を要する。その診断と治療に関する知見を概説する。

**Key words** 肺静脈閉塞症、肺毛細血管腫症、診断、治療／pulmonary veno-occlusive disease, pulmonary capillary hemangiomatosis, diagnosis, treatment

## はじめに

肺高血圧症は、心臓カテーテル検査で平均肺動脈圧が25 mmHg以上である場合に診断される。原因となる疾患はさまざまであり、肺高血圧症国際会議で臨床診断分類が検討されてきている。2013年にニースで第5回国際会議が開催され一部改訂されたが、肺静脈閉塞症（pulmonary veno-occlusive disease : PVOD）については、以前のダナポイント分類と同様、肺毛細血管腫症（pulmonary capillary hemangiomatosis : PCH）と合わせて1群に分類された<sup>1)</sup>。1群肺動脈性肺高血圧症（pulmonary arterial hypertension : PAH）とは病態や予後が異なるために区別されている。診断は病理組織所見に基づいて行われる

ため、肺生検を行わない限り生前に確定診断に至ることはない。肺高血圧症の症例に対する肺生検は危険性が高く、実際にはほぼ不可能である。また、臨床的にPVODと考えられていても最終的に組織所見でPCHと診断される例もあり、臨床的にPVODとPCHを鑑別することは難しい。このため、実臨床の場では両者をまとめてPVOD/PCH疑い例として扱うことが多い。本稿でも両者を区別しない場合にはPVOD/PCHとして総称する。

## PVODの概要

これまでに報告されているPVOD症例は200例程度である。人口100万人あたり約0.2人程度とまれであり、男女差はなく、多くは50歳代までに発症すると報告されている<sup>2)</sup>。

\* 独立行政法人国立病院機構岡山医療センター臨床研究部 (〒701-1192 岡山県岡山市北区田益1711-1)

PCHはPVODよりもさらに少なく、まとめた報告は少ない<sup>3)</sup>。当院でのPVOD/PCH例は男性が約8割を占め、平均年齢47歳である。

PVODとPCHの発症の原因は完全には解明されていない。PVODでは、喫煙、ウイルス感染や毒物、抗癌薬や骨髄移植との関連が指摘されている<sup>2)</sup>。PCHの肺組織では、特発性PAHにおいて重要な役割を果たすplatelet-derived growth factorとその受容体の発現が亢進しており、PAHと同様の機序で病態が進行する可能性がある<sup>3)</sup>。また、特発性PAHと関連するbone morphogenetic protein receptor 2の遺伝子異常の報告もある<sup>4)</sup>。最近、異なる2つのグループの研究から、PVODとPCHの家族内発症例で同一の遺伝子異常が同定され<sup>5)6)</sup>、両疾患の病因・病態解明のさらなる進展が期待される。

予後は極めて不良で、PVODは症状発現から2年以内にほぼ全例死亡する<sup>8)9)</sup>。PCHも2~3年で右心不全や呼吸不全により死亡する<sup>3)</sup>。急速に悪化し数カ月で死の転帰をとることもある。さまざまな治療薬の登場によりPAHの予後は改善してきているのに対して、PVOD/PCHは診断が困難であるうえに肺高血圧症治療薬の有効性が低く、格差が顕著となっている。

PVOD/PCHは、非常にまれな疾患であるという印象があるが、特発性PAHと臨床的に診断された症例のうち約10%が剖検でPVODと診断されたとする報告もある<sup>10)</sup>。実際、当院でもPVOD/PCH症例はPAH症例数の約1割にあたる。また、膠原病関連PAHの中でPAH治療薬への反応不良例に肺静脈病変があるという報告もあり<sup>11)</sup>、近年、PVODとの関連が注目されている。

## PVODの診断

心臓カテーテル検査で肺高血圧の存在が証明されている症例で、病理組織でPVOD/PCHと診断されれば確定診断となる。肺生検は危険性が高いため生前に確定診断がつくことは通常ないが、PVOD/PCHは、肺高血圧症治療薬に対する反応性や予後が異なるため、PAHとの鑑別が重要である。以下に述べるような特徴的な臨床症状や検査・画像所見などに基づいて、PVOD/PCH疑い症例の臨床診断を早期につけ、治療方針を選択する必要がある。

### 1 病理組織所見の特徴

PVOD/PCHの確定診断の根拠となるのは病理組織所見である。詳細は「PVODの病理」の項に譲るが、PAHでは肺動脈の内膜・中膜の肥厚を主な特徴とするのに対して、PVODは線維性組織による肺静脈の狭窄/閉塞を特徴とする(図1a)<sup>12)</sup>。PVOD/PCHともに多層性に増殖した毛細血管が認められ、弱拡大で観察すると、比較的正常な部分の中に病変部分が斑状に散在する像が確認できる(図1b)。PCHの特徴は、この多層性の毛細血管が正常構造を破壊しながら浸潤することである<sup>13)</sup>。両疾患とも、繰り返す肺胞出血によるヘモジデリンの沈着を認める。

### 2 臨床所見

#### A 臨床症状

初発症状は労作時息切れ、呼吸困難が多い。胸部不快感、胸痛、失神なども認められる。PAHでは、膠原病で肺病変を伴う場合を

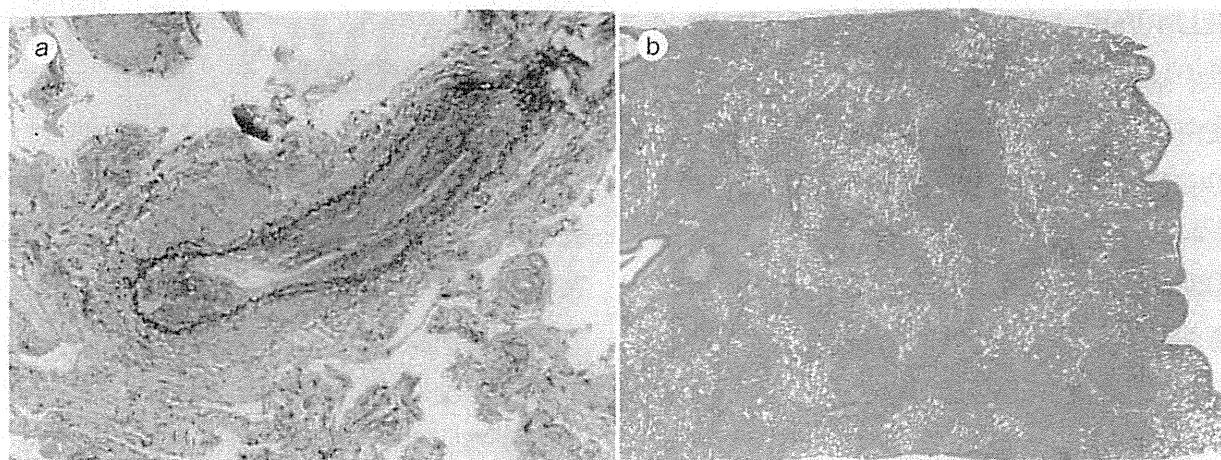


図 1 PVOD の病理組織像（自験例）

小葉内静脈の著明な狭窄と、その周囲に毛細血管の多層性増殖を認める（弾性線維染色）。

a. 肺静脈内に線維成分による高度狭窄を認める（エラスティカマッソン染色）。

b. 多層性に増殖した毛細血管腫様病変が斑状に散在する（HE 染色）。

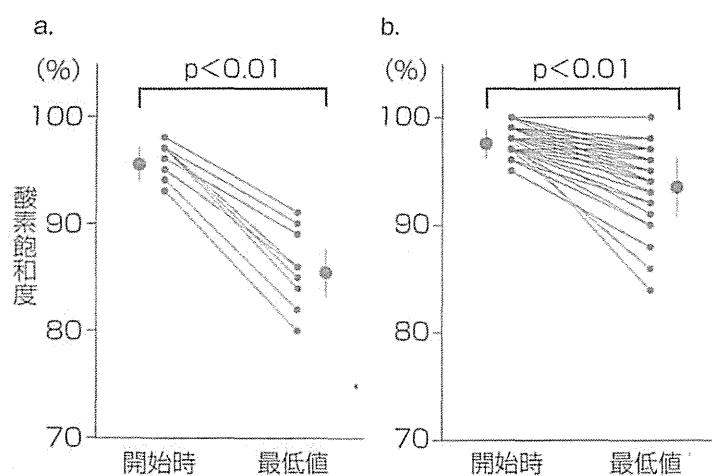


図 2 6 分間歩行試験における酸素飽和度の変化

PVOD/PCH 10 例 (a) と特発性 PAH 44 症例 (b) の 6 分間歩行試験における酸素飽和度の変化を示す。安静時酸素飽和度も PVOD/PCH では PAH に比較すると有意に低値であり、運動により酸素飽和度がさらに有意に低下している。

除いて、右心不全が進行しない限り著明な低酸素血症を示さないが、PVOD/PCH では、安静時低酸素血症のない例でも、日常生活上の軽労作で酸素飽和度の著明な低下を認める点が特徴的である。安静時から低酸素血症を呈し、ばち指の認められる症例もある。

## 図 6 分間歩行試験

6 分間歩行試験施行時に著明な酸素飽和度の低下を認める。6 分間継続して歩行すること自体が困難であったり、失神に至ったりする症例もあるので、施行に際しては十分な注意を払う必要がある。当院の PVOD/PCH 例では、6 分間歩行開始前と比較して平均約 10% の酸素飽和度低下を認めた（図 2）。

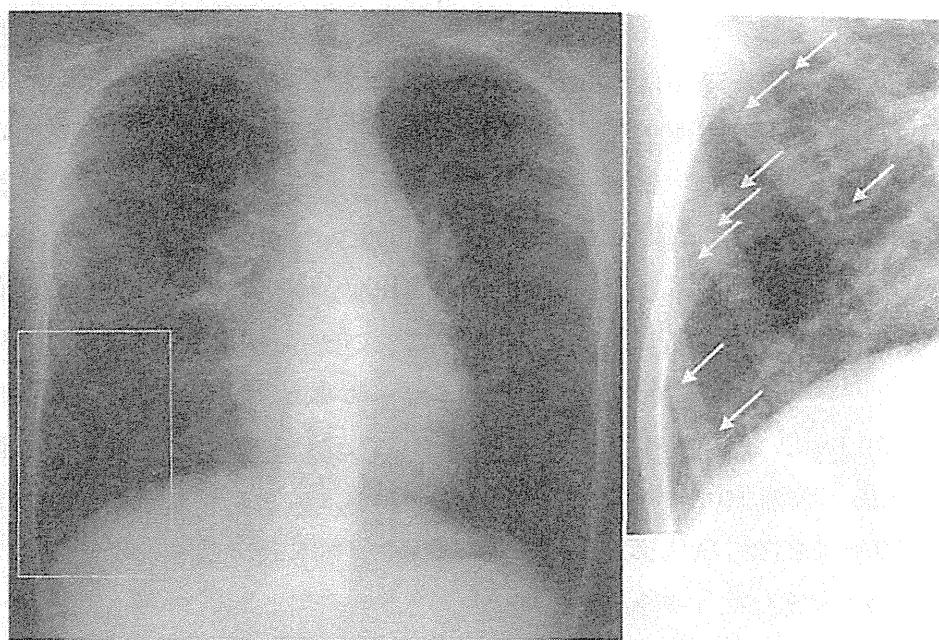


図 3 PCH 症例の初診時胸部 X 線写真  
肺動脈径の拡大を認め、拡大像で Kerley B line を認める（矢印）。

#### ■ 呼吸機能検査

呼吸機能検査では軽度の拘束性障害を示す症例が多い。時に閉塞性障害を呈することもある。拡散能 ( $DL_{CO}$ ) の著しい低下が、本疾患に特徴的である。

#### ■ 画像所見

詳細は「PVOD における画像所見の特徴」の項に譲るが、胸部 X 線・CT などの画像では、PAH とは異なり、PVOD/PCH に共通した特徴的な所見が認められる。

#### ● 胸部 X 線・CT

胸部 X 線で粒状影の目立つ症例もあるが、病初期には明瞭でない場合もある。下肺野を拡大して注意深く観察すると、Kerley B line を認めることがある（図 3）。胸部単純 CT、特に high-resolution CT (HRCT) では、粒状影や小葉中心性の ground glass opacity (GGO) が認められる<sup>14)15)</sup>。反応性の縦隔リンパ節腫大と胸膜直下の隔壁肥厚、小葉中心性

の GGO の 3 徴候が PVOD の診断に有用であるとの報告がある<sup>15)</sup>。ただし、特に病初期においてはこれらの特徴的な所見が当てはまらない症例もあるため注意が必要である。

#### ● 肺換気血流シンチグラフィ

換気シンチグラフィでは欠損像がなく、肺血流シンチグラフィでは、主に上葉を中心とした亜区域性的血流欠損を認め、血流ミスマッチを呈する<sup>16)</sup>。しかしながら、PAH のシンチグラフィと比較して有意差がなかったとする報告もあり<sup>17)</sup>、さらなる検討を要する。時に、慢性血栓塞栓性肺高血圧症で認められるような区域性的大きな血流欠損を呈する症例がある。この場合には、欠損部分に対して選択的肺動脈造影を行い、慢性血栓塞栓性肺高血圧症に特徴的な web や band といった所見がないことを確認する。

#### ■ PVOD/PCH 臨床診断スコア

PVOD/PCH の臨床的な特徴に関する報告



はすでに複数あるが、残念ながら見過ごされているケースも多い。早期に臨床診断を行う方法を確立するため、当院で治療を行った肺高血圧症例のうち、PVOD/PCH（臨床診断例を含む）とPAHのさまざまな臨床指標を比較検討し、PVOD/PCHとPAHの鑑別に有用な臨床指標を抽出し、PVOD/PCH臨床診断スコアを作成した<sup>18)</sup>。男性、喫煙歴あり、6分間歩行試験中の9%以上の酸素飽和度低下、DL<sub>CO</sub> 34%未満、胸部HRCTでの小葉中心性GGO、小葉間隔壁肥厚、粒状影、肺血流シンチグラフィでの上葉欠損、の各項目をそれぞれ1点とし、特に疾患特異性の高かった血管拡張薬による肺水腫の既往は2点とした。合計10点のうち4点以上であれば感度94%、特異度91%でPVOD/PCH疑い例を診断することができた。

## PVODの治療

PVOD/PCHは診断される症例数が少なく、予後不良であるため、有効な内科的治療法が確立されていない。根本的な治療法は肺移植のみであるが、日本における肺移植の待機期間は約2年であることと、進行の速い症例があることを考慮して、移植希望のある症例では早期に肺移植登録を行う必要がある。

### A 支持治療

PAHにおいても支持療法に関するデータやエビデンスは少ないが、PVOD/PCHについてはさらに少ないため、一般的な治療法の考え方を述べる。

上述のようにPVOD/PCHでは低酸素血症を呈するため、酸素投与が必要である。状態

の悪化に伴って安静時の低酸素血症も悪化するため、高流量が必要になっていく。抗凝固療法については、PVOD/PCHの病理組織所見で肺胞出血が多く認められることを考慮し、PT-INRを低めにコントロールする。肺胞出血が疑われる場合には即時に中止し、改善した時点で再開する。また、PVOD/PCHでは血流の閉塞機転が肺静脈側にあるため、PAHに比較して肺水腫や胸水貯留が出現しやすい。水分貯留に伴って酸素化が悪化するので、利尿薬を適宜使用する。

### B PAH治療薬

PVOD/PCHでは、肺動脈より下流の肺静脈／毛細血管に狭窄・閉塞が存在する。肺動脈を拡張させるPAH治療薬を使用すると、肺細静脈の血管抵抗が下がらないうちに肺小細動脈が拡張し、毛細血管の静水圧が上昇する。これにより肺水腫が惹起される危険性があるため、本疾患に対するPAH治療薬の使用は禁忌と考えられてきた。一方で、近年、PVOD例でPAH治療薬が有効であったという症例報告もあり、PVOD/PCHに対する有効性は確立していない。

エポプロステノールについては、低用量投与では小細動脈圧は上昇するが、6 ng/kg/min以上の投与では肺血管抵抗が低下するとされ<sup>19)</sup>、その慎重投与が移植へのブリッジ治療として有効であったという症例報告もある<sup>20)</sup>。急激な增量を避け、肺水腫の悪化が認められた場合は、静脈側も拡張し静水圧が低下するまでエポプロステノール增量を中止し利尿薬を併用することで、長期的に緩徐な增量による治療が可能となる。われわれの施設では、PVOD/PCH 8例（全例が後に病理組織

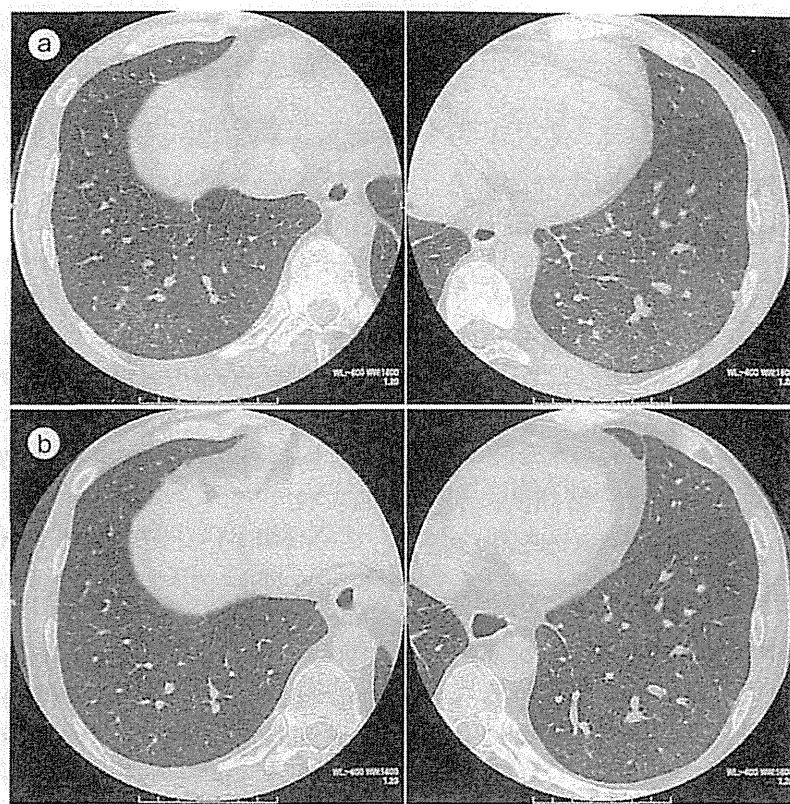


図 4 PVOD 症例の HRCT 画像

40 歳代、男性。当院初診時、労作時の著明な酸素飽和度の低下と肺拡散能低下に加え、HRCT で小粒状影、小葉間隔壁の肥厚、ground glass opacity を認めた (a)。PVOD/PCH の可能性が高いと考えエポプロステノールの導入は見合わせ、イマチニブを開始し移植登録を行った。イマチニブ治療開始 2 年半後には心係数は変化なく、平均肺動脈圧が低下していた。HRCT の所見は改善していた (b)。のちに脳死肺移植を受け、PVOD と確定診断された。

で確定診断された）に対して、エポプロステノールによる治療を行った<sup>21)</sup>。平均最大投与量  $55.3 \pm 10.7 \text{ ng/kg/min}$  を、平均投与期間  $387.3 \pm 116.3$  日にわたって投与した結果、全例で一時的に心拍出量が改善し、WHO 機能分類、6 分間歩行距離、BNP 値も改善した。しかしながら、肺動脈圧は低下せず、さらに、エポプロステノールの增量に伴って間質影と酸素化が悪化し、次第に高流量の酸素投与が必要となった。したがって、エポプロステノールは、慎重に低用量で使用するならば移植までのブリッジ治療としては有用であるが、根本的な治療ではない。治療開始後に急

激に悪化する危険性もあることから、使用経験の豊富な施設での施行が望ましい。

#### ■ 新たな治療薬の可能性

肺高血圧症の病態は、肺血管の収縮と過剰な細胞増殖による血管内腔の狭窄・閉塞による。そのため、血管増殖抑制を目的とした分子標的治療薬の有効性が期待できる。中でも、イマチニブは platelet-derived growth factor 受容体のリン酸化を阻害する薬剤であり、PVOD で有効であったとする症例報告もある<sup>22)</sup>。イマチニブは本疾患には保険適用外であるが、当院では自主臨床治験として合計 7



例のPVOD/PCH症例に対して、イマチニブの長期投与を行った。エポプロステノールは投与に伴って間質影の増強が目立ったのに対して、イマチニブでは間質影の増強は認められなかった(図4)。血行動態についても、心係数が低下することなく、平均肺動脈圧は全例で低下した[56.3±8.9 vs. 39.9±10.8 mmHg (p<0.05)]。治療開始後生存期間は平均4.1±0.7年と改善し、2例では、脳死肺移植へのブリッジ治療となった。強い水分貯留傾向、腎機能障害などの副作用や、適切な症例選択や至適投与量の設定など、今後解決すべき課題も多いが、PVOD/PCHの治療薬として期待できる。また、マルチキナーゼ阻害薬であるソラフェニブは、イマチニブより多くのシグナル伝達経路を阻害するため、イマチニブの反応不良例や二次無効例にも効果的である可能性がある。肺高血圧症の動物モデルやPVOD症例において有効性が報告されている<sup>7,8)</sup>。最近報告された遺伝子異常<sup>5,6)</sup>に関連して、新たな治療薬の開発が期待される。

## まとめ

近年、肺高血圧症治療の進歩が注目を集め、結果として肺高血圧症と診断される症例が増加している。また、経口治療薬の登場により、肺高血圧症治療を多くの施設で受けられるようになってきている。しかしながら、症例数はPAHほど多くないが、通常のPAH治療では改善せず、むしろ悪化する危険性があるPVOD/PCH症例が存在することに留意する。肺高血圧症治療を行う前に、必ずPVOD/PCHの可能性を検討する必要がある。可能性が否定できない場合には、治療経験の

豊富な施設と連携しながら治療にあたる。上述したように、現在のところPVOD/PCHに対して長期的に有効性の確立した治療法は存在しないため、本疾患に特異的に有効な治療法の確立が望まれる。

## 文献.....

- 1) Simonneau G, Gatzoulis MA, Adatia I, et al. Updated clinical classification of pulmonary hypertension. *J Am Coll Cardiol* 2013; 62:D34-41.
- 2) Mandel J, Mark EJ, Hales CA. Pulmonary veno-occlusive disease. *Am J Respir Crit Care Med* 2000; 162:1964-73.
- 3) Almagro P, Julia J, Sanjaume M, et al. Pulmonary capillary hemangiomatosis associated with primary pulmonary hypertension: Report of 2 new cases and review of 35 cases from the literature. *Medicine (Baltimore)* 2002; 81:417-24.
- 4) Runo JR, Vnencak-Jones CL, Prince M, et al. Pulmonary veno-occlusive disease caused by an inherited mutation in bone morphogenetic protein receptor II. *Am J Respir Crit Care Med* 2003; 167:889-94.
- 5) Assaad AM, Kawut SM, Arcasoy SM, et al. Platelet-derived growth factor is increased in pulmonary capillary hemangiomatosis. *Chest* 2007; 131:850-5.
- 6) Eyries M, Montani D, Girerd B, et al. EIF2AK4 mutations cause pulmonary veno-occlusive disease, a recessive form of pulmonary hypertension. *Nat Genet* 2014; 46:65-9.
- 7) Best DH, Sumner KL, Austin ED, et al. EIF2AK4 mutations in pulmonary capillary hemangiomatosis. *Chest* (in press).
- 8) Shackelford GD, Sacks EJ, Mullins JD, et al. Pulmonary venoocclusive disease: case report and review of the literature. *AJR Am J Roentgenol* 1977; 128:643-8.
- 9) Montani D, O'Callaghan DS, Savale L, et al. Pulmonary veno-occlusive disease: recent progress and current challenges. *Respir Med* 2010; 104: S23-32.
- 10) Pietra GG, Edwards WD, Kay JM, et al. Histopa-